

# チャ

## 1. 鳴き声チャ

山地に雪が降るようになると低山に移動してくる鳥がいます。餌を取りにくくなるため積雪の少ない低地にくるのです。冬鳥といわれている渡り鳥との違いは、繁殖地が近くの山地であるということです。コガラとかゴジュウカラが打吹山で見られるようになります。同じように冬期のみ姿を現す鳥が、日本で最小クラスのミソサザイです。ちょっと薄暗い椿の平や鎮霊神社の池の奥、大江神社の裏でチャ チャと鳴き、存在が確認できます。動かないと姿が見えません。



ミソサザイ



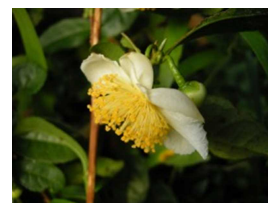
ウグイス

同様に、藪や茂みでチャッチャッと鳴くのがウグイスです。夏よりも個体数が10倍以上に増えます。鳴き声の力強さで雌雄差が聞き分けできれば鳥類観察のベテランです。雄の方が力強く鳴くのです。ミソサザイはウグイスの雌よりもまだ弱いチャ チャです。

鳥は鳴き声で存在がわかることが多く、聞き分けが必要ですが、文字で表現することも難しいので耳で覚えるしかありません。シジュウカラの鳴き声はいろいろありますが、これは単語に相当し、組み合わせて文章を作って情報伝達をしているという論文があります。同じ鳥がいろいろな鳴き方をするとところも悩ましいところです。

## 2. チャノキ

秋も終わりに近づくと開花します。冬枯れの時期に咲くところはツバキの仲間らしく、暖地の植物といえます。花は小さめですが、雄しべが多く、ツバキらしさがあります。

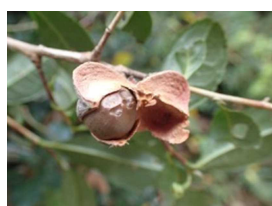


花

喫茶のため鎌倉時代初期の1191年栄西禅師が中国から種を持ち帰ったものが、現在日本で栽培されているチャノキであるといわれています。しかし、野生状態で見るができますから、奈良時代あるいはそれ以前に渡来したものか、温暖な時期からの自然分布か判断できないようです。化石も発見されています。メタセコイアのようにかつては日本に分布していたものが絶滅し、人の移動に伴って再びもたらされたとも考えられます。分布場所を調べることで、人の手によるものかどうかの判断材料になりそうです。打吹山では、公園部分、長谷寺周辺、相撲場近くにあり、人が持ち込んだものの逸出を示しているようです。



葉



種子



発芽

種子がたくさん実りますが、実生の苗を見ることがありません。土中に埋没することが少ないからなのかと考え、20粒の種子を取り播きしてみると11個体発芽しました。種皮の発芽孔部分を削って薄くしたものは20粒中5個体の発芽でした。同じく硬い種皮を持つヤブツバキは小苗を見ますし、種子を埋めると全て発芽しました。チャノキの種子は土中に埋まることなく乾燥してしまい、発芽しないのでしょうか。ヒサカキ(倉吉のシブ)のような灌木と同様、幹より根の方が太く長く、刈り込みに耐える形態をしていますので、一度植えると絶えないようです。

(倉吉博物館専門委員 國本洗紀 2022)